
緋弾のエリア-黒い転生者

TR

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のエリア - 黒い転生者

【Nコード】

N5403BA

【作者名】

TR

【あらすじ】

まあそんなこんなではじまるよっ

プロローグ（前書き）

てっくれ〜!!・・・すみません、ちよつと言ってみたかっただけです。というわけで緋弾のエリアの二次創作をノリで作ってみました。作者はblack catとか好きな厨房なんで武器とかでちよくちよく入れていこうかと思ってます。初投稿なんでよくわからないところもあるかも知れませんがまあ、気軽にこいつの駄文見て笑ってやるう的なノリで見ただけだと嬉しいです。それではノシ

ブローグ

「うぼっ」

目が覚めて第一声がこれだった。

「……………はあ、何言ってるんだオレ」

喉が酷く渴く、汗ばんだシャツを脱ぎ捨て、冷蔵庫の扉を開ける。

ペシがぽつんと一っ

「マジで何もねエ……………」

仕方ないので未開封のペシを勢いよくあける。

プシュッと心地良い音を起てたペシを口元へ運ぶ。

ゴクツゴクツ、喉に炭酸特有の刺激が刺さる。

「あゝ、やっぱり朝から炭酸は無いわ」

寝室を出てリビングに向かおうとすると、『you've
got a mail!』、けたたましいメールの着信音が鳴り響

く。

が、面倒なのでそのままリビングへ。

背凭れがやや低めの椅子に腰を下ろすと、また眠気が襲ってきた。

え？オレは誰だつて？こいつは失敬名乗ってなつかったな、オレは「さいかかいと雑賀海斗」、ごく普通の高校生で、趣味はギターとかエアガン集めとか・・・まあ色々あるな。特技は銃を見たら種類、系統、口径、発射機構など、まあその銃のさまざまなのが判るというもの、べつにオレヤングガンとかじゃねえし、この特技さして意味無いけど・・・とにかくそんな人間なんだ。

と、自己紹介を終えたところでまた眠気が襲ってきた。

「だああー、クツソ眠くて仕方ねえ・・・散歩にでも行くか」

適当に身支度をする^と街にむかって歩き出した。

〜二十分後〜

街に到着、まあ街と言うかかなりの大都市だが、ここら辺はよく知っている、小さい頃からよく来た場所だ、まあそれは置いて、どこへ行くところか？

1 ゲーセン

2 楽器屋

3 ライブハウス

4 喫茶店

とりあえず3と4はない、この時間はまだ開いていない。ちなみに今日は日曜日で現在時刻は10時ジャスト、なぜか楽器店は開いている。が、生憎ギターは持ってきていないということでゲーセン、君に決めた!!

まずは千円をダイナミックに両替、硬貨が十枚出てきた、さあいくぜと言わんばかりに某湾岸を走るレーシングゲームに連コイン、開店早々だというのにほかの三席は埋っていた。

適当にタイムアタックを選択ちなみに某首都の高速のランキングの大半はオレの34R一色、青いフォルムに黒のカーボンボンネットが映える、しばらく走っていると後ろにはギャラリーができていた。

「こりゃいいとこ見せねーとな」

へらへらと笑いながらギアを6速に入れる、流石、オレのGT-Rは世界一イ・・・スマソ、とか思ってる内に時速341キロに到達ま、楽勝だな・・・。

〜一時間後〜

連コインした分のクレジットを使い果たし、乱入にも滞りなく勝利したオレは帰る前に銀行に行つて金を引き出そうとしていた、ATMを弄っているその時、

パン！！

乾いた銃声が耳を貫く。

プロローグ2（前書き）

長くなっちゃまったプロローグ

プロローグ2

乾いた銃声が耳を貫く。

「てめえらおとなしくしゃがれえー!!」

比較的低い声を漏らすそいつは、十中八九強盗に間違いない、いやむしろ強盗より注目すべきはその強盗の手元、そう、その手には拳銃が握られていた。

トカレフTT-33通称トカレフ、ソビエト連邦陸軍が1933年に制式採用した軍用自動拳銃で、正式名称トウルスキー・トカレヴァ1930/33、結構前からロシアから密輸されている拳銃だな」

ボソツと呟いてみるこれは癖でもある。

安価で威力もそこそこあるが、比較的弱い部類の銃である事には変わらない、オレは確証も無く勝てると思った、否「思ってしまった」

オレの近くで子供が泣き出した、するとその強盗は威嚇射撃のつもりだったのだろう、泣き叫ぶ子どもにむかって、発砲した。

トカレフから吐き出された鉛の塊は、子供の右腕を貫通した。

声にならない声が耳を劈く、その瞬間オレの中で何かが切れた。

オレは咄嗟に強盗に向かって駆け出した、勝てる、こいつになら勝てる、構え方もまるで素人だ、サバゲーを積み重ねてきたオレが負けるわけが無い、自分に言い聞かせるように。

「っ！！テメエこの銃が見えねえのか！？」

そう言いながら銃口をオレに向けてない時点でお前の負けさ」

オレはそう言いながらヤツの腕を掴みトカレフの安全装置を起動した。

安全装置の働いたトカレフなど恐れるに足りない、オレは足を振り上げてトカレフを蹴ろうとした、その瞬間、男の右腕には二十センチ程の刃渡りのナイフがあった。

（なんだこれ、視界が悪いな、今何時だっけ？そっだ、あいつオレを刺したのか）

オレの視界の先では青い服の奴等が男を拘束している。

てか、超眠い、瞼が重い、意識が遠退く、

（そうか・・・これが・・・死ぬってことか・・・）

転生もプロローグの内ww

「……オッスオレ海斗、今なんか変なところにいる。例えるならそう、

……裁判所だ。

げぶんげぶん、悪い、もっとちゃんと話そう、私こと雑賀海斗は強盗に刺されて死んだはずが、何故か無傷でその上なにやら中世の雰囲気醸し出す、裁判所的な施設にいる、以上！さっきまでのあらずじ。

だがさっきとは違うところがある、オレの前にスーツを着た眼鏡の男性が一人、さながらビジネスマンのような印象を受ける。

そう、まずは現状の把握だ、ここは何処か？貴方は誰か？……etc、聞きたい事は山ほどある。

「失礼ごこち」聞きたいことは大体分かります、まずは付いてきてください」

そういうと男は歩き出した、歩くこと10分、歩けど歩けど廊下ばかり俺の目に映るのは高そうな絨毯と、時折姿をのぞかせる絵画

のみ、いい加減飽きてくると突然男が口を開いた。

「いい加減飽きてきたようですね、大丈夫ですよもうじき着く、それよりもまだ名を名乗っていませんでしたね」

「私の名前はジン・ラウ、ジンとでも呼んでください」

さっきまでの冷たい印象とは対照的にとても温かい笑顔だった

「そうか、オレは、「おっ」と言う必要はありませんよ」

「何故だ？」

「それをこれから話します、それにほら、もう着きました」

オレが歩を止めるとそこはすでに廊下の突き当たり、そして全長5mはあろうかという、やけに大きな扉があった。

「どうぞなかへ」

ジンは丁寧に扉を開くと中へ入るよう誘導した。

入るなり顔を覗かせたのは、まるで法廷のような内装、まさかここで裁かれるのか？なんて思ってたらジンが「心配しなくても貴方が裁かれるようなことはありませんよ」といつてきた、こいつまさか超能力者？とか思ってる、「惜しいですね」とまたもやいつてきた。

「まあ私のことは奥の部屋で、ゆっくりと話しましょう」

などと言われほいほい着いていくオレ、まあ今は緊急事態だ、しようがないんだろ。

「どうぞ、お掛けください」

今度は学校の応接室のようなところに来た、これまた高そうな椅子に座る。

「あ、あの「単刀直入に言います、貴方は死にました」

転生もブローグの内www2

「ぱ？」

自分でも分かるくらい間抜けな声を出してしまった。それよりも、オレが死んだってどういうことだ？確かに刺された記憶はあるが、傷は完全に塞がって……

(そもそも、あんな傷こんな早く塞がるのか？)

オレの頭を一つの疑問が過ぎった。

「まあ簡単に言えば貴方は今魂だけの状態ということですよ」

ますます解らないオレを尻目にジンは語る。

「まあ何故ここに呼ばれたかという点、貴方は生前とても良いことをしました、なのに死んでしまったため、再び生き返ることを許されました、所謂転生ですね」

昔から自分でも思ってた状況把握能力が高いつて、ここに来てようやく理解した、いやまだ確証が有るわけじゃない、でも信じざるを得ない、複雑な心境がオレの中で渦巻いてる。

「混乱しているのは解ります、ですがこれは事実です、受け入れなければならぬ……」

ジンもバツの悪そうな顔をしている。

「……まで、生き返るということは元いた場所に戻れるというところか？」

「……残念ながらそうではありません、貴方が行くのはとても危険な世界です」

「はあ！？ふざけんなよそんな世界まっぴら御免だぜ！！」

「ふざけてなんかいませんよ！！私はいつだって大真面目だ！！」

ジンが似つかわしくないほど大声で叫ぶ。

転生もブローグの内www2(後書き)

途中までですが都合で今日はここまでとします。すみません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5403ba/>

緋弾のARIA-黒い転生者

2012年1月15日01時51分発行